
すばらしき人生

湯北

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

すばらしき人生

【Nコード】

N1162A

【作者名】

湯北

【あらすじ】

トオルとカナは今年最後の日 12月31日 で付き合って十年を迎える。だけどトオルの部屋にあった小箱が原因で大ゲンカ…なかなか素直になれない二人の話。

第一話：ケンカ

「もう無理だよあたし」

カナは半泣きの顔で声をふるわせながらそういうと部屋からでていった。

僕は部屋に残されてため息を吐いた。

三十分前

「トオル大丈夫？」

カナが廊下からリビングにつながっているドアから顔をのぞかせた。年末なのに風邪を引いた僕は熱に弱く、今回の風邪には四苦八苦していた。

「なんとか生きてる。仕事が休みのときでよかった。つかあんま近づくなよ？」

カナは苦笑いをしながら冷えた手を僕の額に乗せた。ひんやりとした感じが心地好い。

「トオルは熱に弱いもんねえ。待ってて。あたしお粥つくるよ」

カナはキッチンにむかおうとして、僕は寝ようとしていた、ハズだった。

ふと、カナの目がサイドボードの上にある何かにとまった。僕は気付かずに目を瞑る。

カナが駆け寄ってきた。

「トオル、これ何？」

ぼんやりと目をあけた僕の目の前にあったのはきれいにリボンののかかった小箱。

一瞬青ざめる

「何でもない」

そう言つてカナから箱を奪い取った。

それでも好奇心の強い、カナの長所でもあり短所でもある。彼女は「何それ？」

としつこく聞いてくる。

そのしつこさにイライラとしてきた僕と、答えない僕にイライラしてきたカナはだんだん口調が強まる。

「何で教えてくれないわけ？言えないようなものなわけ？」

「違うつつつてるだろ」

「じゃあ何なのよ？」

「パシン

一瞬、何がおこったのかわからずにいた。ぶった僕もぶたれたカナも立ち尽くしている。

「おまえには関係ないんだよ」

やつのことでしばらくだした声は震えていて情けなかった。

カナの目から涙が一粒こぼれた。

「…なんでそうやって…いつも自分の頭だけで…ついていけない。もう無理だよあたし」

カナは泣きながら半ば叫びつつ、廊下を走って行った。熱があがってきたのか、うまく追い掛けることのできなかった僕はだいぶ格好の悪い男だ。

よたよたと這う様にして玄関にいくと、おろしたばかりの彼女のブーツがあつた。

靴も履かないで出ていくななんて無謀すぎる。

それから一カ月近くカナはこなかった。

今まで、一週間も二週間もあわなくても平気でいられたのがうそのように、僕はイラつき、タバコの量がだいぶ増えた。それに、カナの好きだったドラマを録画したビデオもだいぶたまりつつあつた。

カナは看護士でこのドラマがやる日は決まって夜勤。

そんなとき、僕がこのドラマを撮っておいて夜勤帰りのカナが見る、そんな生活をしていたのに。

「ただいま」

きしむドアをあけながらそう言ってすぐに後悔した。誰かが返事をくれる筈がない。

リビングに入っすぐラベンダーの香に気付いた。

カナ。急いで電気をつけると、テーブルの上に夕ご飯が作っておいであつた。

そして、花瓶にさしてあるラベンダー。

カナの好きな香。

もうだいぶ冷めたおかずをつまみながらビデオをセットした。

いつまでこんなこと繰り返すんだろ。いや、もう終わりかもしれない。

僕ら自体が。

カナはもう無理だと言つたし僕も熱の所為とはいえ追い掛けられなかつた。

僕らはどんなカップルよりたくさん喧嘩をして、そのたびに別れそうになつた。

でも僕がぶつたことはなかつたしカナが泣いたこともなかつた。

あの、小箱が恨めしく思える。

明日は、僕らの十周年記念で、カナの誕生日でもある12月31日

第2話：一步

「A H A P P Y N E W Y E A R ! !」

テレビの中の芸人たちが、目が痛くなるような着物をきて大声で叫んでいる。

結局、カナは来ないで新年を迎えてしまった僕。自棄酒で、ビールを何本も飲んでしまい頭がだいぶクラクラするのだった。

目の前には、ケンカの原因になったあの小箱がある。

リボンを解いて、小さなフタをあけた。

小さなダイヤのついた結婚指輪。ちゃんと、カナのサイズに合わせてある。

とうとう渡せなかった。もう、終わりだろう僕ら。

―ピンポン―

玄関のチャイムがなり、覗き窓も見ないでドアをあけた。

「はいはいだれですかーこんな夜遅くに」

「迷惑だった？」

またしても青ざめた僕。カナが頬を赤くして立っていた。寒かったのだろう。ずいぶんココでまったのだろう。酔いが、醒める。

「…入れよ」

ぶつきらぼうに言ったものの、内心ドキドキして心臓が飛び出そうになった。少し小走りになってテーブルの上にあった例の小箱をスウェットのポケットに押し込む。

「お酒、飲みすぎじゃない」

「新年だし」

カナはお気に入りのコートを壁にかけながら苦笑いをした。
しばしの沈黙。

もう、僕らは何をするべきなのか、わかっているはず、はずなのに。あと一步が踏み出せない。

「あのさー…」

お互いの声が重なって、さらに気まづくなってしまった。
先に逃げ出すのは僕。

「俺、たばこ買ってくるからまってて」

カナの返事を待たずに、そのまま飛び出した。

第3話：思い出

外の風はずいぶん冷たく、酒でほてった体を冷やした。

タバコを買おうと自販機に近づくと、その横に古びたジュースの自販機が置いてあった。

ココアの茶色い缶が僕を十年前にトリップさせた。

そう、あれは僕らがまだ高校生だったあの日

12月31日

年末も年末だったのに、その日はなぜか補習があつて、しかも最悪なことに夕方の六時からだった。

当然、帰りは九時とか十時。

今思い出しても、なんであんなばかげた補習があつたのか腹がたつけど。

「間瀬くん」

近道をしようと公園を横切っていた僕に話かけてきたのはカナだった。

その頃のカナは髪が長くて、男子の間じゃあマドンナなんて言われてた。

「あれ、南野どうかした？」

カナはずいぶんあわてて走ってきたのか、息はあがっていたし綺麗な白い肌はほんのり赤く染まっていた。

僕は少しドキドキして、マフラーを巻き直した。

「ありがとう」

ベンチに座ったカナに、買ってきたココアを渡した。

プルタブをひねるとココアの甘い匂いが漂う。

「あたしねえ、間瀬くんに話があるんだけどね――」

「そっぴやさあ、今日の補習どうだった」

その時、いまでもよくわからないけど僕は話を替えた。
それから僕らは適当な話をした。

ココアはとうの昔に冷たくなってしまったのにカナが大事そうに飲んでいたので覚えている。

「そろそろ新年始まるよ。帰ろうか」

僕が立ち上がろうとするとカナが僕のマフラーをつかんだ。苦笑いで振り向くとカナがふくれて僕を見上げていた。

「話」

そう言うカナの首元に、僕のマフラーを巻いた。

「寒いんだろ」

「うん」

一瞬驚いた顔したカナだったけどうれしそうに笑って僕に抱きついてきた。

「寒」

でてきたココアを両手で包んだ。

じんわりした暖かさが伝わってきて少し、何かを思い出した気がした。

「トオル」

後ろから声をかけられてびくつきながら振り向くとカナが、頬を赤く染めて立っていた。

僕は落ち着かずにマフラーを巻き直した。

「トオル、あたし」

カナの手をとってココアを握らせた。カナの目が丸くなる。

「寒いんだろ」

マフラーを巻いてあげるとカナはうなずいただけだったけど、僕に抱きついてきた。僕もやんわりと抱きかえした。

第4話：日の光と共に

カーテンの隙間からの光で目を覚ました。

もう夜はあけてしまったようだ。眩しい。

と言っても僕らが眠ったのはほとんど朝方だったけれど。

眠い目をこすり隣で寝ているカナがおきないように静かにベッドからでる。

カーテンを少しめくって空を見ると、まだ朝が明けたばかりでごく神秘てきな色をしていた。

振り向き、カナの薬指にはきらめくあの小さな指輪を見る。

昨日の夜、やっと渡せた、あの指輪。

カナは泣きながら飛び付いてきたっけ。

思わず僕も泣きそうになって必死でこらえたのだけど？その後、たまったドラマのビデオを二人で見で、冷えたココアを飲んで、キスをして―

なんて幸せなんだろうと心から初めて思った。カナと一緒にいられることが。

ベッドの中、肩をだしたままねむるカナの寝顔はやすらかで満足気だ。

もう、大丈夫だろう、僕ら。

何があっても。すばらしい人生を二人で過ごせる気がするんだよ。

「ありがとな」

自然と涙があふれてきた。

日の光が目にしみる。

カナの手を軽く握ったら、かすかに握りかえしてきた。もう一度、強く握った。僕らは人間だから、くだらないいさかいなんて五万と繰り返しながら生きついく。

そのたびに傷ついたりとか落ち込んだりとか。

でもそれは人間にしかできないことだから。

だから、大切に。お互いを大切に思う気持ちを忘れなかつたら大丈夫だから。

僕はこれからもカナと生きていく。カナがいなければ人生は確立しないからね。

第4話：日の光と共に（後書き）

初めてなのにこんなにつづいた話でいいのか分かりませんが…
書きたいことがうまくまとまらず、惨めな作品になってしまったの
で次回からはまた頑張りたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1162a/>

すばらしき人生

2010年10月20日02時33分発行